

論 文

# アニメ『太陽の王子 ホルスの大冒険』における 「心の多面性」の描かれ方について

村 瀬 学 谷 本 由 美

生活科学部・人間生活学科 生活科学研究科・生活デザイン専攻  
修士課程2年

## はじめに

人間には「二面性」がある。それは「心の多面性」とも呼ばれ、「文学」において久しく表現されてきた。とくに、そういう複雑なものは文字を使った「文学」においてしか不可能なのだとして久しく考えられてきた。それゆえに、アニメーションのような映像表現が生まれた頃は、こういうものは「複雑な心の動き」などを表現するには不向きであると思われていた。事実、ディズニーが作り出したアニメの世界は、飛び抜けて優れた映像表現を作り出してきたにも関わらず、その世界のおもしろおかしさの部分だけが誇張されて、こうしたものを楽しむのは子どもたちだけだと見なされる風潮が生まれてきていた。

そういうディズニー風アニメの見方に対して、ヨーロッパでは「心の多面性」も、アニメのような映像によって表現可能であると考えた人たちが現れてきた。それは例えば『雪の女王』<sup>(注1)</sup>であり、『王と鳥』<sup>(注2)</sup>などであった。こういったヨーロッパの作品の強い影響を受けて、1960年代の日本のアニメ界においても「子どもの娯楽」にはとどまらないものを作ろうという動きが出てきていたのである。そういう志が大きく結晶した作品に『太陽の王子 ホルスの大冒険』1968（以下『ホルス』と略記する）がある。この作品の創造し得た質の高さには、独特なものがある。

本論では、この作品に表現されたたくさんな試みの中の、とくに「心の多面性」の描き方について焦点を当て、実際に文字による以外に映像でそういう世界が描き得たのかどうか検証してみたいと考えた。

## 1. 物語の設定

物語は北国のある村に「悪魔」がやってきて「村人」を滅ぼそうとする設定からはじまる。だが、その村に立ち寄ったホルスという少年が、「村人」とともに「悪魔」に立ち向かい、最後に「悪魔」を倒そうとするのである。要約してしまうと、特別に目新しい筋立ての作品のようには見えないかもしれない。似たような展開の話は、世界の古い物語にもたくさん見られるわけで、事実、この作品の着想もアイヌの神話の中の「オキクルミ」と呼ばれる少年の英雄が村人を守る話から得たとされている<sup>(注3)</sup>。しかし、それはうわべの話であって、着想はどうであれ、実際に作られた作品は、その作品の実現した表現の独創性において論じられ評価もされるべきである。

それゆえに、この作品の注目すべきところを見ていきたい。その第一の点は、作品の基本設定の中核をなす「悪魔」の表現の独創性にある。この作品の「悪魔」は「グルンワルド」という個人名で呼ばれるのだが、決して「個人」として設定されているわけではない。この「悪魔」は、作品の中では雪や氷、寒さの支配者のような者として描かれ、「象徴としての冬」として存在している。いわば「冬将軍」のような存在である。しかし、この「象徴としての冬」は季節の冬を表しているだけではない。「心を冬にするもの」としてもやってくるのである。つまり季節の一つである冬を表しているだけでなく、「心の中」に冬をもたらすものとしてもやってくるのである。「心を凍らせる」ために。問われるべきは「心の冬」とは何かという問いかけである。

一方、そういう「悪魔」に対して戦いを挑む「ホルス」は、村に「春」をもたらすものとして登場する。それは季節的な春をもたらすことでもあるが、人の心の温かさや思いやりを含むものであり、「象徴としての春」をもたらす存在でもある。しかし、ここでも同様の問いが出てくる。いったい「心の温かさ」とは何か、「思いやりの心」とは

何かと。この作品を質の高いものに行っているのは、こういう簡単には答えられない問いに対して、さまざまな映像表現を使って描き出そうとしているところにある。そのことについて、具体的に映像表現を通して見ていきたい。

## 2. 悪魔グルンワールドとは何者か

改めて、悪魔グルンワールドがどのような存在として描かれているか見てみる。もし悪魔グルンワールドが、単に村を滅ぼし、地上を征服する存在として設定しただけなのであれば、それは何も悪魔でなく、人間であっても良かったはずである。かつて和人がアイヌの村に攻め入って村を滅ぼしていったように、である。しかし、本作品における悪魔の描かれ方はそういうふうにはなっていない。悪魔グルンワールドは、直接に村を攻撃するというのではなく、まず村人の「醜い心」を利用し、仲間同士で疑い合いをさせ、皆の心をバラバラにし、同士討ちをさせて滅ぼすようなことを企む存在として設定されている。この悪魔の性格は、作品冒頭のホルスの父による遺言シーンで観客に意識される。父ははっきりと人々を「バラバラにさせる」存在として悪魔のことを息子に話して聞かせるからである。それは人々の団結をバラバラにするという意味合いと、一人の人間が猜疑心等によって、自分で自分の心の中をバラバラに引き裂くという意味合いの両方を含む。この後者のあり方が、「心の多面性」というふうに表示されてきたものでもある。

こうした視点で、悪魔と村人の関係を考えると、一見すると外側から「バラバラにさせようとやってくる悪魔」と、それに対して「一致団結して戦う村人」という対立構図でアニメが描かれているかのように見える。しかし、実際に描かれた映像は、よく見るととてもそんなふうには描かれてはいないのである。実際の映像では、悪魔は村人たちが元々持っている「バラバラの心」を引き出す火種となるものをまず与えようとする。悪魔は決して村人たちの心を魔力で操作して、バラバラにしようとするのではない。悪魔が与えたきっかけを元に、村人同士が自分たちの猜疑心などを広げることで、自分たちの心を、自分たち自身でバラバラにしていくのである。そここのところを考えると、悪魔という存在は、まるで村人たちの心を外型化したものとも読み取れるものに描かれている。人間には一つにまとまろうとする心もあれば、ちょっとしたきっかけでバラバラになる心もある。悪魔はそれを巧みに利用しているだけなのだという感じも見て取れる。このようなことが文字による

説明でなく、映像という手法によって十分に表現されているのである。

ここで、この独特な「冬としての悪魔」のイメージのルーツについて少し触れておきたい。「冬としての悪魔」のイメージに最も近いイメージは、すでに述べてきたアニメ『雪の女王』に見出すことができる。この作品における「雪の女王」は、氷の城に住み、雪を操るまさに「季節としての冬」として存在しているが、同時に、人の心を冷たくする存在としても設定されている。事実この作品には、仲の良い少年カイと少女ゲルダが描かれるのだが、そのカイは「雪の女王」の企みで心がすさみ、少女ゲルダとの間の優しく温かかった関係をバラバラにされてしまう。この凍ったカイの心を溶かすために少女ゲルダが北国に向かう。それが『雪の女王』の物語なのであるが、このゲルダの一人途な描かれ方に若き日の宮崎駿が深く感動して、自分もこのようなアニメを作りたいと思うに至るのである<sup>(註4)</sup>。

## 3. 少女ヒルダの造形

次に注目したいのは、美少女ヒルダの存在である。かつてヒルダのいた村も悪魔によって滅ぼされ、両親を殺されている。そのために寂しい心を持つ少女であるが、そのうち、悪魔の妹として思い込まされて育てられる少女としても設定されている。つまり彼女は、自分を人間と感じる自分と悪魔と感じる自分の両方を生きていて、常にその二つの心の間で揺れ動きながら生きている。しかし、悪魔の妹である限りは、新しい村があると、その村を滅ぼすためのスパイとして、村へ送り込まれる存在にもならなければならない。一見すると天使のような美しさをもつ少女が、その内部に悪魔からの使命を受けて動くものを持っているのである。このような複雑な人物設定は、それまでのアニメには見られなかったものである。この陰影に富んだ驚くべき清楚で美形の少女を造形したのは森康二である。彼の描くヒルダは美しさを持ちながら、同時に闇を持つ存在であり、その両方をあわせ持つように映像化されており、その二重の姿の造形は見事である。このヒルダ像がなければこのアニメの成功もあり得なかったかも知れない、と評されてきたのはその通りだと筆者にも思える。事実、内面の微妙な動きを表した彼女の表情や、彼女が唄う唄などは、本作品の中でも際立っている。それゆえに、公開当初から現在にいたるまでに行われてきた『ホルス』の作品内容の分析の多くが、ヒルダの批評に当てられてきたのはやむを得ないことかも知れない<sup>(註5)</sup>。

ところで、すでに述べたように、このヒルダの造形で大事なところは、悪魔の誘導により、自分を悪魔の妹だと思い込まされているところにある。そしてこの「思い込まれ方」は実に根深いものとして設定されているのである。ちょっとやそっとでは氷解しないような「思い込まれ方」である。それはかつて「オウム真理教」に「入信」させられていた「若い信者」を思い起こさせるものがある。「指示される言葉」が絶対的なものとして作用しているのである。しかし、物語の中で彼女は、村を滅ぼすために村に入っていくのだが、村人たちと暮らす中で、人間としての自分の意識も呼び覚まされていき、次第に葛藤することになる。もし彼女が人間ではなく、本当に悪魔の妹として生まれた存在なら、このように葛藤することもなかったかもしれない。彼女は人間であるが故に、「人間」である面と「悪魔の妹」として信じ込まされている面との間に立ち、その両方の面を「意識」せざるを得ない存在として生きるのである。「人間」と「悪魔」、そのどちらでもあり、またそれゆえに、結局どちらにもなりきれないことがヒルダの苦しみとなり、それがあの憂いを含む表情や唄として表れるのである。ヒルダの美しい「微笑み」は、笑っているようであり、悲しんでいるようでもあり、また泣いているようにも見える。監督の高畑勲はこの「微笑み」に「嗤(わら)い」という漢字を当て、「苦悩と悲しみの目と眉に、嗤いの口をモニタージュすること」<sup>(注6)</sup>によって表現したと説明している。つまり「嗤い」の表情という映像表現においても、「苦悩と悲しみの目元」と「笑顔の口元」の二面性を持たせていたのである。

こうした主人公のもつ二面性を考えてみると、日本初のカラーアニメ映画である『白蛇伝』(1958年公開)におけるヒロイン、白娘(パイニャン)も、人間の姿をしているが、実は白蛇であるという設定になっていたことを思い出す人がいるだろう。これは、一見するとヒルダと似た設定のようにも思える。パイニャンもまた「人間」と「蛇」の両面に悩んでいる。しかし、『白蛇伝』では最後に許仙(シュウセン)に恋をしたパイニャンは、「蛇」である自分を捨て、「人間」となる道を選ぶのである。体は「蛇」であったとしても、心理的にはすでに「人間」となっていたのである。しかし『ホルス』のヒルダは、そのように自らの「悪魔の妹性」を捨て、「人間」になることはなかなかできないのである。「教祖の教え」から自由になれないというようなことでもある)。だからヒルダは最後まで、「人間」と「悪魔」の両面を抱えたまま、ホルスに「敵意」を向け続ける。ホルスに懸命に説得されても、「人間」とし

て生きることを選べず、かといって「悪魔」として生きることもできなくなり、悩み続けるのである。

こうしたヒルダの内面が引き裂かれる中で、彼女を「人間」の方に引き寄せてくれるのは、彼女を慕う村の小さな子どもたちである。中でもフレップやマウニという幼児は、ヒルダを信じて慕っており、こうした自分を慕う幼い子どもを、悪魔の手下が凍え死にさせようとするシーンが描かれる。そのときヒルダの心の中に、この子を助けなければという思いが出てくる。こういう場面を通して、ヒルダが次第に「人間」の心の方に傾いていくように描かれるシーンは、見ていて十分に説得力があると感じられる。

#### 4. ヒルダの唄

悪魔の妹として、村を滅ぼす使命を受けたヒルダの武器の一つに「唄」がある。竖琴をかき鳴らしながら唄うヒルダの唄には、村長の座を狙うドラゴに「眠ったように何もかも忘れてしまう唄」と言わせる。一たび彼女の唄を聞いた村人たちは皆、働くのをやめてしまい、うっとりとし、聞き入ってしまう催眠のようなものを持っているのである。村という共同体での暮らしを繁栄させるためには、みんな力を合わせ、心一つにして働かなければならない側面があった。しかし、ヒルダの唄はそんな村人の心をバラバラにしてしまうように作用してくるのである。そこにヒルダの唄の魔力があった。

確かに、音楽には聴く人の心を惹きつけるものがある。その結果、本来ある方面に向けていなければならない心を、そこから引き離してしまう力も持っている。例えば思春期の頃、音楽に夢中になり、勉強やそれ以外のことにまったく手がつかなくなることが起こるように。

もともと村の祭りには唄は欠かせない大事なものであった。実際アニメの中でも、大漁を祝う祭りや結婚式のシーンなどで、村人たちによって盛大に唄が唄われている。そういう唄は、村人を団結させるように作用していた。集団をまとめるためには唄は欠かせないものであった。

しかし、そんな村人の中にヒルダがやってきて、唄を唄うと、人々は労働するのをやめて、催眠にかかったみたいになり、ヒルダの唄に聞き惚れてしまうことになる。ここではヒルダの唄は、人々の団結をバラバラにして、ヒルダの個人的な雰囲気だけに酔わせるように作用してしまうのである。

ここに「唄」のもつ二面性が見て取れる。つまり、集団としてまとめるように作用する面と、個人ひとりひとりの楽しみとして作用してしまう面の二面性である。

## 5. ヒルダの唄の特殊性

このアニメでは挿入歌を意図的に大事なものとして扱っている。ある意味では、このアニメほど挿入歌に重きを置いた作品はないのではないかとすら思われる。そこで、もう少しだけ、ここで扱われる唄の特殊性について考察しておきたい。

実際の作品の中でヒルダの唄は4曲ある。2曲はホルスとの出会いの際、ホルスを魅了させる唄であり、他にはヒルダが一人きりで自分のために唄う曲が1曲、そして問題となる村人たちを惑わせる唄が1曲である。では、村人たちを惑わせ、バラバラにしてしまう唄とは、どのような唄として唄われているのだろうか。それは「子守唄」としての唄である。

唄は「昔々、神様が言いました。おやすみ皆、優しい私の子どもたちよ」という歌詞ではじまる。だから「神さま」が「私の子どもたち」を眠らせるための唄であることがわかる。そして、この唄には「子どもたち」として「クマ」や「カワウソ」が登場する。これら動物はアイヌ神謡にも登場する代表的な動物であり、本作品がアイヌ神謡を元に考案されたという背景に繋がる。しかし、内容としては、アイヌ神謡とは決定的に異なるところがある。

アイヌの神話ではクマやカワウソといった動物は「カムイ」であり、あらゆる自然すべてが神々（カムイ）である。そして、人間（アイヌ）と神々（カムイ）は対等な関係性にある。ところが、ヒルダの唄う子守唄には、一人の「神様」だけがあり、クマやカワウソは神様の子ども、つまり神様が創造し、支配しているというものになっている。

このことから考えると、ヒルダの唄う子守唄はただの子守唄ではなく、実は村人の宗教観を変えさせるように働きかける唄になっていることが見えてくる。表面的にはアイヌの宗教観に馴染み深いクマやカワウソを登場させてはいるが、自然とともにある神々を大事にするというのではなく、自然の上に君臨する一人の神を崇拜するように誘う唄になっているのである。

もともと村の人たちはアイヌの人々のように、自然崇拜を行う人々のようであり、自分たちの衣食住を得る（すなわち生きること）仕事すべてにおいて自然神と関わり、働くたびに神々を身近に感じている人々のようである<sup>(註7)</sup>。しかしヒルダの唄によって、身近にいる神々ではないものに魅了されることになり、そうなる仕事への姿勢も変わってしまうことになる。ヒルダの唄を聴くと皆が働かなくなるといえるのは、こうした意味もあるということが見えてく

る。

さらに映像を見ると、ヒルダは村の中心の広場にある1本の高い木の枝に座って、村人たちを見下ろしながら、弾き語りて唄を聴かせているのがわかる。その姿はまるでヒルダという神が村人たち（支配する子どもたち）に子守唄を聴かせているかのように見える。そんなふうにして唄われる唄をよく聴いてみれば、（子守唄）でありながら、「黒熊の腕はもうはねた」とか「カワウソたちはもう火にくべた」というような残酷な内容になっていることに気づかされる。

## 6. ヒルダには本当の唄が唄えない

上述のように、ヒルダの唄は村人を惑わすのであるが、性質がまったく異なる唄もまたヒルダによって唄われている。とくにホルスとの出会いで使われた唄は、ある意味ではホルスを惑わした唄ではあるが、それは上述の子守唄における性質とは異なっている。その唄の神秘的で美しい響きの中に込められた孤独感に、同じく孤児であるホルスも深く共感するものがあったからである。しかし、ヒルダの孤独は、ホルスが孤独であったこととは違っている。ヒルダは唄う。「どこから来たの？ どこへ行くの？」と。この歌詞は人間と悪魔の間で揺れ、葛藤し、人間として生きたい気持ちを持ちながらも、悪魔の妹として生きる道しかない苦しむヒルダの孤独が唄われるものだったからだ。

ヒルダの唄には、何度か「小鳥」が出てくる。それはどれも「一人で寂しい小鳥」と形容されて唄われている。特にヒルダが荒野で一人唄う詩には「おいで、うたのない小鳥」という一節があり、小鳥がヒルダ自身の比喩として唄われていることがわかる。ところで、幼女マウニに唄をせがまれたヒルダが「ヒルダには本当の唄は唄えないの」と言う場面がある。ヒルダにとっての本当の唄とは、何だったのだろうか。それは、愛する人のために唄うような唄だったのかも知れない。それでもマウニがヒルダに唄をせがむということを考えて、マウニがヒルダの唄から「優しさ」や「安心感」やそれに近い「愛」を感じていたことも見て取れるのではないだろうか。

こうしてみると、ヒルダの唄う唄は、決して一律ではないことがわかる。ヒルダの唄は聴き手によって様々な印象を持たせている。ホルスは孤独を読み取って惹かれ、村人たちは甘美さにうっとりし、扇動されたりする。一方ポトムは唄に反感を感じ、ドラゴは自分が権力を得るために利用しようとする。このように、ヒルダの唄は多様

な受け取り方をされる含みのある唄として設定されている。こうした「唄の多面性」は、どれもヒルダの心性の多面性を表しているのである。こうした唄からもヒルダという人物像の複雑な心理が読み取れる。

ところで、ヒルダの唄を聴いても特に反応を見せないのは、がんこじいさんだけである。これは、彼がヒルダの複雑さを見抜いていたからではないかと思われる。だからこそ、ヒルダの唄で働かなくなった村人たちに対して文句を言う少年ポトムに向かって「お前さんだって、たった一人のヒルダに負けてるんじゃないか？」ということができていたのであろう。

## 7. 村人たちの二面性

表向きの物語の設定では、皆の心をバラバラにする存在である悪魔に対して、村は団結した存在として、その団結力で悪魔に対抗するよう描かれているように見える。事実、村の暮らしでは、祭りや結婚式が描かれ、そこでは共同体として村人たちが団結して作り出す文化が描かれている。では、本当にこの村人たちは皆「団結」し、まとまっていたのだろうか。村人たちの様子を分析していくと、すでに指摘してきたように必ずしもそうではなかったことが見えてくる。

最初に村人たちの心が一つではないとわかるのは、「おぼけカマス」（悪魔の仕掛けた怪魚で、村の川を上ってくる魚を途中で全部食べてしまう）退治に行ったモラスが死に、村人たちによる葬式が行われる場面である。ここでは、カマスを退治しようとしても無駄だと主張するドラゴと、モラスの仇を討とうとするボルド（村の若者）と、それに対して「命を粗末にしないで」「一人でより何人かが力を出し合ったら、智恵を出し合ったら……」と反対するチャハル（モラスの妻）、そして「モラスに続く者はおらんのか」と怒るがんこじいさん（モラスの父）らというように、それぞれの意見がバラバラになっている。そして何より、本当に村人たちが団結していたのなら、この時点で皆が力を合わせてカマスを退治していたはずなのに、しかし、モラスだけがカマスを退治に行き、死ぬことになってしまっていたのである。

さらに村の中では、村長に代わって権力を手に入れようとするドラゴの存在が描かれる。彼はまず村長がホルスを疑うように仕向け、続いて、ヒルダの唄を利用して村人たちをも扇動し、皆がホルスへ疑いの目を向けるように仕向けて、村からホルスを追放することに成功する。彼が皆

の心に宿らせた「疑いの目」は強烈であり、その結果、村人はしだいにバラバラになってゆくのである。こういうふうに見てゆけば、「村人」というのも、決して「団結」できているわけではなく、「心がひとつ」になっているように描かれているわけではないことがわかる。

## 8. ホルスの二面性

そんな中に主人公のホルスが現れる。『太陽の王子 ホルスの大冒険』という題の作品なのだからホルスはきっと「王子」のように描かれているのだろうと思ってしまうのだが、それはそうではない。作品の中でホルスが「王子」のように描かれているシーンはどこにもない。ただ最初に、大地の神を象徴するような巨大な「岩男モーグ」の肩にささった「太陽の剣」を抜くことが出来ていたもので、それで「太陽の王子」と呼ばれることになっただけである。王家の息子であるとかそういう設定はない。

そんな誰にも抜けなかった「太陽の剣」を抜くことが出来たホルスという少年は、一見するととても勇敢で、まっすぐな心をもった正義の少年であるかのように登場している。彼には、ヒルダのような二面性や葛藤などないかのように見える。しかし物語の終盤近くになり、そうではないことが見えてくる。それは彼が、文字通り「迷いの森」に落ち込むシーンにおいてである。彼はなぜ、「迷いの森」に入ってしまったのか。本当に「まっすぐな心」であるならば、「迷う」ことなどなかったはずである。このことについて、ホルスの村での行動について分析することで考えたい。

ホルスも実は物語の展開の中でいろいろと悩むのである。自分としては困っている村人を助けようと立ち振る舞うのであるが、「よそもの」としてこの村に来た限り、どうしてもみんなと「同じ」ようには行動できないのである。そのために、村のために良かれと思ってとった行動が、逆に村人の不信感を買うようになってゆく。そういうホルスと村人たちの間の不信感が広がる過程を大きく三つに分けて考えてみたい。

一つ目は、手に入れた「太陽の剣」を鍛え直す過程であり、二つ目には、ヒルダという少女を村の中へ招き入れた過程であり、そして三つ目には、「おぼけカマス」や「銀色狼」と戦ったところである。

一つ目の行動は、手に入れた「太陽の剣」はそのままでは使えないものだったので、鍛え直さなければならなかった過程で起こる不信感である。この作業は、悪魔を倒すた

めには必要不可欠のものであり、村や村人たちのためでもあった。だから村人たちが皆で力を合わせて村づくりの仕事をしているとき、ホルスは「太陽の剣」を鍛えていた。しかし、悪魔の存在をよく知らない村人たちにとっては、そんな彼の個人的な行動はうまく理解されていかなかった可能性がある。そればかりか、村の仕事を一緒にしないということは、村の団結には逆効果であり、村のメンバーとして認められないという村人も出てきていたと考えられる。

二つ目の行動は、自分と同じく孤児であったヒルダを村へ招き入れたことから起こる不信感である。こういうことをホルスは村人の了承を確認せず独断で行った。本来、村にとって「異人」を入れるということは、危険を伴い、慎重に警戒すべきことであった。そんな重大な判断を、新参者のホルスが独断で行ったのである。事実、それがヒルダという悪魔のスパイを村へ入れることになってしまった。このこともまた、村人に反感を持たれることへ繋がっているのである。

三つ目に、悪魔の手下である「おぼけカマス」や「銀色狼」と戦う過程についてだが、これらの戦いはいつも、ホルスが一人で戦い、誰もその戦いの様子を見ていない。「銀色狼」に至っては、村人はその存在すら確認したことがない。

こうした村人には理解しがたいホルスの行動は、村人に不信感を植えつける元になる。事実、こういうホルスの個人プレーをネタにしてドラゴが「きっと何かうまい仕掛けがあるんです。騙されているんですよ、あたしらは」と村長に吹き込むことになる。そして、村人とホルスを引き裂こうと企むヒルダの思いとうまく結びついてゆく。このようにホルスは、それが村人のためであると思い、自分一人だけで戦おうとしてきているのだが、それが次々と裏目に出してしまうのである。

こういうホルスの行動は、「英雄」としての生き方に関係する。「英雄譚」ではたいていの主人公は親と早くに死に別れ、「一人で闘う」ように生きているからだ。ホルスも母はおらず、年老いた父と二人きりで生活してきた。そのような状況で生きていくには、いろんな困難を自分一人の力で乗り越えなければならず、実際そのようにしてきたはずである。そのため、彼はたいていのことを自分一人で行える強さを身につけてきた。だが、そのためにかえって皆の力を求めることに思い至らず、一人ですべて解決しようとするようになる。しかしそれが結果的に村人たちの不信へと繋がってゆく。一人で生きていくために必要であった強さが、村の中で皆と生きていく中では弱さとして表れ

てしまうのである。

ホルスには本当の意味で「仲間」とはどういうことなのか、わかっていないところがある。監督の高畑勲が「主人公であるホルスは力いっぱい生きようとします。しかし全てを一人で解決して来た彼は、村へ入ってからでも、力を合わせるこの意味やそのむつかしさを彼のセリフほどには理解していないのです」<sup>(註8)</sup> と言うのは、こういったことであると考えられる。

もし、敵が力だけで村を滅ぼそうとする設定であったならば、ホルスも英雄としての一人の力で対抗できたかもしれない。だが、ホルスの敵は、村人たちの心をバラバラにし、村人同士争わせ自滅させる悪魔として描かれていた。このような悪魔と戦うには、皆がバラバラに一人で戦うのではなく、団結することが必要であった。そのためには、普段からの連携行動が必要であった。連携行動がない中で行う村の中でのスタンドプレーは、理解してもらえないのである。

このように見ると、ホルスが村を追放されたのは、ドラゴに仕組まれ扇動されて起こった突然の出来事では決してないことがわかる。元々理解されにくい生き方をホルスは自ら選んで生きていたからである。しかし普段一緒にいたポトム、フレップ、がんこじいさんたちはホルスを信じていることができた。少しでも一緒に暮らすことのできた者たちの違いがそこに表れていたのかもしれない。

しかし、ホルスの個人行動を理解できない村人たちは、ドラゴに扇動され、ホルスに石を投げ彼を村から追放してしまう。ある時は英雄視していたホルスを、簡単な扇動によって追放してしまうのである。このことは村人たちの浅はかさを表しているように見えても、同時に、ホルスが村の仲間として受け入れられていなかったために、起こるべくして起こったことでもあることがわかる。

こうした村人からの追放に加えて、さらにヒルダから、自分は悪魔の妹であり、悪魔の使命をおびて村に来たという彼女の正体を明かされることになり、それまで信じてきたことの多くがホルスの中でガラガラと崩れてゆくを感じる。そしてこのことをきっかけにして、ホルスは「迷いの森」へ突き落とされることになるのである。

ホルスからしてみれば、今まで皆のために良いことをしてきたつもりが、逆に責められ、今までは自分と通じ合い、一つだと思ってきたヒルダの心が、実はそうではないということがわかり、何を信じれば良いのかわからなくなってしまふ。相手の心がバラバラに見えるようになったことで、自分自身の心もバラバラにされ、そして「迷いの森」に落

ちていくことになる。ここにきて、ホルスもまた一途でまっすぐな心を持つだけでなく、人を疑う心をもつ人物であるように描かれていることがわかる。ホルスもヒルダや村人たちと同じく、「バラバラの心」を体験していくのである。

## 9. 「迷いの森」の造形

こうして大きな山場を迎える「迷いの森」の考察に入ることになる。「迷いの森」の導入は、のちに『ホルス』の評価の中で大きく賛否が分かれたところである。見てきたように、「迷いの森」は、人の心が多面性に引き裂かれるときの心情を映像として表した高度な造形表現であった。だから、そんなものを子ども向けのアニメに持ち込んで子どもが理解できるのかという批判が出てくるのは当然であっただろう。が、はじめにみたように、『ホルス』の制作者たちは、この作品を子ども向けだけのアニメとは位置づけてはいなかったのである。だから公然と「迷いの森」を導入しようと考えた。その時、この「迷いの森」のイメージ化に大きな影響を与えたものがあつた。それは東山魁夷の作品群であつた。彼の絵画がなければ、「迷いの森」もきっと構想されることはなかったのではないだろうか。

ここでアニメに描かれた「迷いの森」の造形の特徴をあげてみる。①木を安定して立たせる土（大地）が描かれていない。②光が入らず暗い（暗い赤や青、緑、黒の色彩で表現される）。③木の枝や根が細かく分岐し、葉は1枚も生えず枯れている。④幻が見える。⑤底なし沼のような水に溺れそうになる、という5点が挙げられる。一体「迷いの森」はどうしてこのように描かれたのだろうか。そしてこの5つの形象は、ホルスのどのような心象と重ねて理解することができるのだろうか、考えてみたい。

まず①の形象は、村を追放され、ヒルダが実は悪魔の妹であり、今まで騙されていたことを知ったホルスが、それまで自分が信じてきたこと（村人もヒルダも自分の仲間であり、皆の敵である悪魔を自分が倒すと決意していた）が崩れたと感じるあり方、そこで自分の土台が崩れてしまったと感じるあり方が①のような形象で表されたと考えることができる。そして今後どのように生きていけば良いか見えなくなったことを②で表そうとした。さらに、村人たちがヒルダと団結していると信じていたのが、実はバラバラだったと気づき、それまでの自分の心もバラバラになってしまうのが③のように描かれたのではないか。そして④で見えた幻というのも、まったく幻影ではないことが見て取

れる。なぜなら、そういう幻は、それまでのバラバラの過去を断片的に繋げていったもので構成されているからである。今まで彼が信じてきたものは、彼の過去のプラス面を繋げて築いていったものであつたが、同じ過去であっても、マイナス面だけを繋げるとまったく違うストーリーになってくる。こういうことは、日常においてよくあることであり、「迷いの森」という装置を使って、それがうまく表現されている。このまったく違うストーリーの中で、村人たちがヒルダに責められる過去の記憶を蘇らせるので、余計に辛く追い詰められた状況が⑤のような映像として描き出されたように思われる。

しかし、この「迷いの森」で過去の幻と対峙したことで、ホルスはヒルダや村人たちとの関係、そして自分自身を見つめ直すことになる。その結果、今まで皆の心は一つと単純に思い込んでいたが、実はそうではなかったということ、だがそれにも関わらず、村の皆は、「一つに合わせようとする心」を持っていることなどを思い出すのである。そして、悪魔はその中の「一つになりにくい心」だけを利用していているということにも気がつく。そして、その悪魔と戦うには、今一度「団結」をすることが必要なのだということを理解して、「迷いの森」を出るのである。そういう意味では、彼にとって「迷う」というのは、今までの自分が気づけていなかったことに気づき得たという大事な体験でもあつた。今まで信じてきたものが一度バラバラになり行き詰まってしまっていたのが、「迷いの森」を経験することで、新たに過去を組み直し、再統合できることになったからである。

## 10. 東山魁夷の風景画の特徴

ところですでに触れたように、この「迷いの森」の造形には、日本画家である東山魁夷の作品の影響がある。作画監督の大塚康生によると、演出の高畑勲が風景の参考に東山魁夷の画集を買ってきたという<sup>(註9)</sup>。だからその影響は作品のあちこちに見られるが、最も影響を受けているように見えるのが、この「迷いの森」の造形である。東山は風景画で有名であるが、繰り返し森を描き、特に1962年北欧へ旅して描いた作品は非常に印象的である。ホルスは1968年公開、製作までに約3年かかっている<sup>(註10)</sup>ことや、『ホルス』の舞台に北欧が考えられたことから、東山の北欧での作品が参考にされた可能性は高い。

しかし何よりも、『ホルス』を見てから、東山魁夷の絵を見てすぐに気がつくのは、東山の絵に描かれた「風景の

二重性」についてである。東山は風景を風景として描くのではなく、しばしば「池や湖に映った風景」としても描いてきた。つまり、絵は上下に分けられて、上半分は現実の風景、下半分は水面に映った風景である。鑑賞者は一つの絵を見ているのだが、そこには上下逆になった、二つの風景を同時に見させられるのである。見た限りでは、二つの風景はよく似ている。しかし、似ているだけで同じではない。片方は現実であるが、片方は映ったものに過ぎず、実体はないからだ。

なぜそんな手の込んだ風景画を東山魁夷は描こうとしていたのだろうか。それは私たちが「現実」と呼んでいるものが、決して「一つ」で「わかりやすいもの」としてあるわけではなかったからである。私たちが「現実」だと思ってみている風景も、じつは水面に映ったものに過ぎないこともありうるのではないかと。

東山魁夷は幼い頃に「現実」は「一つ」ではないのだという苦い経験をしている。それは「両親の不和」にまつわるおぞましい思い出で、それは生涯消えることなく彼をとらえ続けていったもので、いわば東山魁夷の根本の現実認識を形成する体験でもあった。

ちなみに彼がこの幼児期の暗い体験を語った唯一のエッセイに「暗い沼」<sup>(註11)</sup>がある。そこでは「幼時の記憶」の暗さについて触れ、「何度、思い出しても、それはやはり暗い沼である。沼は森の奥に、黒く淀んだ水を湛えて静まり返っている。いつも、霧が漂っていて、森の深さも解らない。落葉が厚い層になって埋まり、その湿った匂いを踏みしめて歩く」と語っている。そして、「あの沼のほとりから、もう、六十余年の歳月を歩み遠ざかって来ているのに、私には湿った落葉の匂いが、今でも身近かに感じられるところを見ると、案外、あの沼は遠いのでは無く、私は道に踏み迷った人のように、沼の囲りを繞って歩き続けているのかも知れない。」と内省し、自身の家族体験についての回想を続けている。つまり、東山にとって、森や湖で表現せずにはいられなかったものは、単なる風景ではなく、一つに見える現実の中にいくつもの現実を見てきた東山自身の体験の表現であった。こうした東山魁夷の独特な現実認識に基づいて制作された絵画と、『ホルス』の現実認識が重なるところで、「迷いの森」のイメージも制作されてきていたのである。

## まとめ

こうしてみると、最初に投げかけた問題意識、つま

りアニメーションで「心の多面性」は描けるのかという問いかけに対して、そういうものを描こうと志すアニメにはそれを実現できる可能性があることが理解できたと考える。文字や文学だけが、独占的にそうした世界を表現できるのではなく、絵画やアニメーションでもそれは可能であることは理解できたと考える。しかし、可能であることはわかっても、十分にそういう可能性が実現できているかということになると、それはまた別な話になる。『ホルス』を作り終えた高畑勲は、自分たちの志が十分に実現できていなかった面も正直に認めている<sup>(註12)</sup>。制作費や時間面での制約も大きかった。しかし、この『ホルス』の持ち得た志の高さと、それを実現しようと試みた映像表現は未だに乗り越えられていないところがある。こういう作品は文化遺産である。私たちは、こうした作品を過去の作品にしてしまわないで、きちんと分析することで、豊かな質は継承していかなくてはならないと考える。

## [注]

- 注1 『雪の女王』とは、アンデルセンの有名な童話であるが、そのアニメが1957年ソ連で製作され、1960年日本でもNHKで放送された。また、1963年には東映動画労働組合主催で上映会が行われ、『ホルス』製作においても大きな影響を与えたと言われている。
- 注2 『王と鳥』とは、1952年フランスのポール・グリモー、ジャック・プレヴェールによって『やぶにらみの暴君』として公開された。日本では1953年公開され、高畑勲他、多くのアニメーターに影響を与えた。それが1979年『王と鳥』として改変し公開された。この改変のいきさつや、この作品がいかに当時高畑らアニメーターに影響を与えたかについては、高畑勲『漫画映画の志——“やぶにらみの暴君”と“王と鳥”』岩波書店 2007年に詳しい。
- 注3 元々、本作品はアイヌをテーマにした深沢一夫による人形劇『チキサニの上に太陽』を原作として作られた。製作の途中、特定の民族の話にしないことと変更にはなったが、アイヌの世界観は大きく影響していることも予想される。後に高畑は「私たちの作品の出発点であり、常に精神的支柱でありつづけた」として、「オキキリムイの子が所作しながら歌った神謡」を載せている。これは、アイヌの英雄神オキキリムイと悪魔の子の戦いが謡われている。アイヌにおける神や悪魔とは、西洋における「神」や「悪



魔」とは異なる観念であることが知られている。アイヌは動物や植物、太陽や風、雷等の自然すべて神とみなし、悪魔も神の一種とみなした。『ホルス』の悪魔は、「冬」という自然を象徴した存在でもあり、それはアイヌの悪魔とも通じる考え方である。

注4 DVD『雪の女王』三鷹の森ジブリ美術館制作2004に収められた「宮崎駿インタビュー “想いをつらぬく”」から。

注5 代表的なものとしては、藤津亮太「アニメーションで映画を作ること」高畑勲演出・大塚康生絵コンテ作画『スタジオジブリ絵コンテ全集第Ⅱ期 太陽の王子ホルスの大冒険 東映アニメーション作品』徳間書店 2003年 がある。また、このことは高畑勲『「ホルス」の映像表現』徳間書店 1983年 や尾崎英夫編『ジブリ・ロマンアルバム 太陽の王子 ホルスの大冒険』徳間書店 1984年 等の表紙がホルスではなく、ヒルダの姿であることから象徴的である。

注6 高畑、前掲『「ホルス」の映像表現』徳間書店 1983年 p. 170

注7 尾崎英夫編、前掲『ジブリ・ロマンアルバム 太陽の王子 ホルスの大冒険』徳間書店 1984年 p. 184、p. 189によると、『ホルス』製作当初に参考または想定した風俗が、アイヌや北欧、フィンランドのラップ族、東欧であること、また当初の時代設定として、初期鉄器時代や新石器時代を想定していたこと（最終的には曖昧にしておくこととなった）、さらに、作品映像からは、漁労生活を営んでいたこと、婚礼衣裳や住居の入口には太陽が描かれていること等から、自然崇拜の信仰を持っていたと考えられる。

注8 高畑、前掲『「ホルス」の映像表現』徳間書店 1983年 p. 198

注9 尾崎英夫編、前掲『ジブリ・ロマンアルバム 太陽の王子 ホルスの大冒険』徳間書店 1984年 p. 184

注10 大塚康生『作画汗まみれ 増補改訂版』徳間書店 2001年 pp. 116-135

注11 東山魁夷「暗い沼」『現代日本の美術 7巻 東山魁夷』集英社1976年 pp. 135-138

注12 高畑、前掲『「ホルス」の映像表現』徳間書店 1983年 p. 202

## 【主要参考文献】

- DVD『太陽の王子 ホルスの大冒険』東映ビデオ 2002年
- DVD『雪の女王《新訳版》』三鷹の森ジブリ美術館ライブラリー 2008年
- 高畑勲演出・大塚康生絵コンテ作画『スタジオジブリ絵コンテ全集第Ⅱ期 太陽の王子ホルスの大冒険 東映アニメーション作品』徳間書店 2003年
- 高畑勲演出・深沢一夫脚本『徳間アニメ絵本21 太陽の王子ホルスの大冒険』徳間書店 1999年
- 尾崎英夫編『ジブリ・ロマンアルバム 太陽の王子 ホルスの大冒険』徳間書店 1984年
- 高畑勲『「ホルス」の映像表現』徳間書店 1983年
- 高畑勲『漫画映画の志 ――「やぶにらみの暴君」と「王と鳥」』岩波書店2007年
- 高畑勲『映画を作りながら考えたこと』徳間書店 1991年
- 高畑勲『映画を作りながら考えたことⅡ』徳間書店 1999年
- 大塚康生『作画汗まみれ 増補改訂版』徳間書店 2001年
- 大塚康生・森遊机『大塚康生インタビュー アニメーション縦横無尽』実業之日本社 2006年
- 森康二『もりやすじの世界』二馬力 1992年
- 宮崎駿『出発点 [1979～1996]』徳間書店 1996年
- 知里幸恵編訳『アイヌ神謡集』岩波書店 1978年
- 萱野茂『炎の馬 ―― アイヌ民話集』すずさわ書店 1977年
- 金田一京助全集編集委員会『金田一京助全集 第七巻 アイヌ文学Ⅰ』三省堂 1992年
- 金田一京助全集編集委員会『金田一京助全集 第十二巻 アイヌ文化・民俗学』三省堂 1993年
- 山本多助『カムイ・ユーカラ アイヌ・ラッ・クル伝』平凡社 1993年
- 東山魁夷「暗い沼」『現代日本の美術 7巻 東山魁夷』集英社1976年
- 山室静訳『みにくいアヒルの子 アンデルセンの童話と詩 2』社会思想社 1987年